

ほんまち

11月 園だより

令和 2年 10月 30日
渋谷区立本町幼稚園発行

<https://shibuya.schoolweb.ne.jp/hon-yo>

絵本でぬくぬく



園長 森山 未来

本園の大きな桜の木が、秋の装いとなりました。子供たちは、はらはらと舞い落ちる枯れ葉を集めて、ままごとの材料にしたり、毛糸を通してペンダントを作ったり、踏みしめてカサカサという音を楽しんだり…様々な遊び方で、桜が届けてくれる秋を満喫しています。花びらの舞う春、若葉の夏、暑い盛りには日陰を作って子供たちを強い日差しから守ってくれるなど、園庭の桜の木は、四季を通じて子供たちを育ててくれています。

朝晩の寒暖差も大きくなり、秋の深まりを感じるようになりました。「〇〇の秋」と、思い浮かべるだけで、ほっと心がほぐれる感じがします。秋は、食欲、芸術、スポーツなど、心にも体にも栄養となるものをたくさん取り込むことができる季節です。冬眠前の動物ではないですが、人間も様々なものを自分の内側に蓄える時期なのかもしれません。

もう一つ、忘れてはならない〇〇の秋があります。「読書の秋」です。読書という言葉は、少し硬い印象なので、「絵本に親しむ秋」と言い換えます。この秋、子供たちにも、お家の人にも、ぜひ絵本に親しんでほしいと思っています。

幼稚園では、週末に子供たちが自分で気に入った絵本を2冊選び、家に持ち帰っています。保育中に担任から読み聞かせをしてもらった本を借りる子、シリーズものを順々に借りる子、同じ本を繰り返し借りる子、インスピレーションで偶然手に取った本の絵が気に入って借りる子、虫好き、動物好き、オバケ好き、ジャンルも選び方も様々です。他にも、毎月1冊、福音館の月刊絵本を各家庭にお届けしています。お家の方は、お子さんが持ち帰った本を手にして、どのようなことをお感じになっているのでしょうか。そして、借りて帰った本をお子さんとのように楽しんでくださっているのでしょうか。

『読み聞かせハンドブック』という本を著した、アメリカのトレリスは、読み聞かせは、子供の興味や情緒的発達、想像力、言語能力などを刺激するだけでなく、人間の声の子供の精神状態を落ち着かせるための最も強力な道具であると記しています。そして、読み聞かせは、聞き手である子供にとってだけでなく、読み手の大人にもよい影響をもたらすとしています。

聞き手にも、読み手にもよい影響があるということについては、科学的な根拠もあるようです。読み聞かせ中の脳の働きを調査したある研究によると、読み手である母親の脳では脳の前頭前野（思考や創造力、コミュニケーション、感情のコントロールの機能を司る）が活発に働き、聞き手である子供の脳では大脳辺縁系（喜怒哀楽を生み出し、感情に基づいて行動を決定する）が活発に働いていることが分かったそうです。大脳辺縁系は、心の脳とも言われ、子供は読み聞かせによって、豊かな感情や情動を育むことができると考えられます。さらに、読み手である母親は、一人で音読するよりも子供を相手に読んでいるときの方が、前頭前野が活発に動き、特にコミュニケーションによって活発になる部分がよく働くことが明らかになったそうです。絵本を通じて、読み手と聞き手が豊かに関わり合っていると断言するのは難しいのでしょうか（日本大学大学院泰羅雅登教授による研究）。

絵本の読み聞かせは、親子にとって一生の宝物となります。秋の夜、子供たちに絵本を1冊選んでもらいましょう。そして、眠りにつく前に、ぬくぬくと温かな布団に潜り込み、子供たちにとって一番大切な人の声で語り掛けてみてください。子供たちは、物語の世界にいざなわれ、自分が確かに愛されていることを感じながら眠りにつくことができるでしょう。秋の夜は長い長い…親子が共に幸福感に満たされて過ごすことができますように。

